通の樣式では、兩端に半蓮のある間に、中央へ蓮花を單に飾つたものであるが、この極めて單純簡素な柱に近く、上から下まで一面に彫刻のある柱もあり、圓形彫刻が額形に代つて居り、又ペルシア風の柱の側に、ギリシア風の人像柱や、同じくギリシア風に出來てゐる日輪の車があるといふ工合なので、前のと之と二本の柱は、空間では、直ぐ隣り合つてゐても、時間では、長い隔りのあるものとせざるを得ないのである。(佛陀伽耶、第二——六圖)こゝで問題としてゐるのは最も古い塔である事は云ふまでもない。

其の最も古代的な圓形彫刻を見れば、サーンチー第二の玉垣の如く、數多の動物があるので一驚するのであるが、その中少くとも四種は、西曆紀元前四世紀以來、已に佛教徒の用ひてゐたもので、之が浮彫にあつても、篤信者の目障りにならなかつた位、その神聖な性質と特殊な意義が出來てゐた樣である。その證として、かの有名な印度ペルシア式の柱頭だけを取つて見よう。之は阿育王が、佛初轉法輪の地に建てたもので、四頭の獅子を背合せにしてあるが、元其の上には大法輪があつたのである(挿圖第四)。この印度彫刻古代